

# 《研究ノート》土器型式と集落

加 納 実

## はじめに

本稿に「土器型式と集落」なる題目を冠したのは、例えば土器型式のもつ系統的側面・編年的位置・分布といった属性と、現在の集落論の到達点が如何なる関係を有するかというような論を進めてゆくことを目的としているからではなく、筆者が縄紋土器を勉強してゆくうえで、縄紋時代の集落を調査してゆくなかで、今まで自分自身の方法について順序だてて理解を深めてゆこうとする態度に乏しかった怠慢を少しでも解消すべく、本誌の誌上を借り活字にしてゆくことのなかから、自分自身の方法論めいたものを反省的に捉え整理し、今後の糧としてゆこうとするものである。故に極めて個人的な見解の整理であって、研究ノートと呼ぶにふさわしいか否かははなはだ疑問であるし、数多くの論文からの引用が多いという点からも読みづらい点が多々あるかと思うが、その点是非とも御寛容いただき、諸氏の御批判、御教示を賜りたいと思う次第であります。

## I

土器型式に対する2つの認識、すなわち「地域的・時期的に細分された一単位としての型式」及び「系統を示す型式」(註1)という認識は、土器型式設定時に於ける2つの方法、すなわち型式学的方法と層位的方法(註2)の存在と密接に関っている。

しかしこの、認識と方法の関係は単純ではなく、一系統の土器群を型式学的に配列したところのその前後のものが一括遺物として現象することもあるし、異系統の土器群相互が型式学的操作によりその同時性が確認されることもある。縄紋土器型式の設定は、方法論的にはこの2つの異なる階層の間を幾度となく往復し検証されながらなされてきた。

では、今日縄紋土器型式を細分してゆくうえで、我々は如何なる態度をとるべきであろうか(註3)。

「たとえ型式をめぐってどのような議論がおこなわれようとも、一つにそれを年代上の単位とみることは、なんらの批判なしに正しい。」が、「細分の基準について、相応の客観性が保持されていなければならない。」のである(註4)。

しかし一括遺物(註5)に関して言うならば、覆土(層序)の形成要因や遺構と覆土との関係等について積極的に議論を重ねる機会に乏しい今日、たとえ「異なった時代に製作された型式が組合せになって発見される偶然性を排除するために」類似例の増加を待ち「それらが同時代の製品である蓋然性が高め」られることがあろうとも所詮「それらの型式の遺物が同時代に作られたものであることを暗示するにとどまる」(註6)のではなからうか。もつとも、この高められた蓋然性を相応の客観性があるものとして捉えるか否かは意見の分かれるところでもあろうが、「異なった製作の同時性をもつところでもあろうが、「異った「製作の同時性」をもつに律せられて化石化するまでの経過が、それらの資料を作り、使用してきたその社会の実態を理解する手がかりになるものだといえる」(註7)という観点を忘れてはならない。つまり、型式学的な連続を捉えることのできるA型式とB型式が、幾つもの事例を通して一括遺物として現象しても、A型式とB型式が型式学的に証明された明らかに製作の時間差を示す概念である以上、一括遺物として捉えられたという事実は、型式のもつ第一次的な年代学上の単位という側面からは分離され、むしろ一括遺物として現象する社会的要因が問われることになるのではなからうか。

しかしこのことは、縄紋土器型式の編年学的研究や、更に先史考古学の方法から一括資料のもつ有効性を全て排除することを述べているわけではない(註8)。

例えば編年学的研究に於いて堀之内1式土器を例にあげるならば、その成立期、関東地方東部に於いて綱取1式土器の南漸・変容の時期が、称名

寺式土器の終末の如何なる段階であるのか、もしくは称名寺式土器を伴わない若干の無人化の時期を挟んでからの南漸・変容であるのかという点に関しては、数多くの一括資料に強く依存しなければならぬし、又、堀之内1式土器のうち胴上半部に区画紋を有する甕形の土器が、紋様帯下端に区画紋を獲得することなく堀之内2式期まで存続するという認識も、型式学的操作と同時に一括資料にも依存している。

更に、先史考古学に於いて、考古学的な諸遺物(土器・石器・骨角器等の諸遺物、更には遺構など)の組み合わせそのものや、組み合わせの変移を文化として捉えてゆくことと筆者は考えるのであるが、「文化の変遷は進行中の状態で観察することは出来ない」(註9)。故に細分された年代学上の個々の単位に如何なる考古学的諸遺物が伴うか否かを見極めてその連続及至断絶を問うてゆかなければならぬ。いわずもがな土器以外の諸遺物は型式学的属性に乏しくそれ自身の分類から編年学的操作を行うことには困難な面が多く、ここに於いても、如何なる土器型式に如何なる考古学的諸遺物が伴うか否かという一括資料の必要性が生じてくる。

少々回りくどくなったが、では、相応の客観性が保持された型式学的操作とは如何なるものであろうか。

「土器型式は、たとえいかに客観的と思われる設定がなされたとしても、その設定の根本は土器の分類作業にある以上、分類基準の設定に関して、ある程度主観的な価値判断が伴うことは避け難い。それ故、土器型式は本質的には主観的な価値判断分類によって設定されたものであると言える。」という指摘(註10)は、「一つの分類方法に基づいた方法によって、個々の事実がまとめられた結果なのだから、それは一つの合理的な思考方法によって認定されたものといえる。」(註11)ことから否定されよう。

すなわち、現象を分類し概念化し、論理的に編成してゆく過程を経ることによって客観性は保持されると考えられるのではなからうか。

## II

山内清男氏の文様帯統論は、実証的に吟味され抽出された型式とその編年学的配列から導きだされたところの、汎日本的な縄紋土器の動態図とも

いうべきものであり、且つ更に一群の土器を型式として再び律することのできる概念でもある。すなわち、文様帯系統論は、型式学の止揚されたひとつの姿であると同時に、土器型式の分析概念そのものであるともいえる。

我々は縄紋土器型式を学んでゆくうえで、縄紋土器の認識史(研究史)に強く依存しているところの、我々の縄紋土器に対する認識を素直に捉え直し、莫大な量に及ぶ資料に対する土器型式の今日的な有効性を真剣に考えることから始めなければならぬ。と同時に、受け継がれた認識の中から縄紋土器型式研究の将来へ向けての展望を射程に置いたところの模索をも続けてゆかなければならぬ(註12)。少々引用は長くなるが「最近では貝塚や集落をほぼ全域調査することになったり、あるいは、比較的近接する遺跡が次々と調査されることなどから由来するある意味で系統性をもった莫大な土器資料をいかに分類し、秩序・意味付けるかが問われていると思われるが、それには自ずと土器型式の分類作業のレベルを変えねばならぬことを自覚する必要がある。土器型式の細分に係わり、どのような属性・特徴に着目するのか常に資料と視点の間を上昇・下降しなければならぬ。また、ある遺跡内に於いて特徴的に顕現する属性もあるであろうし、遺跡間に通有なものかという問題もあろう。より広域の中で安定したのもあろう。留意しなければならないのは、土器資料のもつ諸属性・特徴が社会的なレベルから個人的なレベルまでの階層性を孕んでいることであり—中略—それに対処するために様々な解釈・概念を用意するという課題が存する」(註13)わけである。

このような状況のなか、我々は縄紋土器型式を概念化して細分してゆくわけであるが、今日・如何なる方法論が呈示されているであろうか。従来縄紋土器を厳密に概念化して扱っていくという目的が全くなかったわけではない(註14)。

しかし、今日我々が土器分析する際の主たる依りどころにする紋様・紋様抽線・紋様構成を概念化した論考は稲田孝司氏の『縄文式土器文様発達史・素描』(註15)を置いて他はない。この論考の中で稲田氏は「施文具が土器の器面で展開する位置や方向によって実現される形態を“文様の方位形態”あるいは“方位形態”として更に方位形態の



中には「土器を長い同筒形と想定した場合、その円筒形の縦方向にそって上端から下端にかけていっぱい延びるものや、円筒形の横方向に延び、器面を一周して完結するものなど、施文対象の土器の形態に直接制約され、逆にいえば、土器の形態に依存してはじめて完結する区画文を第一次区画文」、「第一次区画で分割された土器の器面を再分割するために、第一次区画文に付着し、第一次区画文と交叉する方向に延びる区画文」を第二次区画文、「平面形において特定の形を構成している方位形態文様」を単位文、というように3つの概念が規定し得るとしている。この論考の中では、単に概念を規定するだけにとどまらず、この概念を通して、縄紋時代晩期前半の分析も行い、更に方位形態文様の多岐にわたる性格についても言及している。氏が示した第一次区画文、第二次区画文という概念の規定性の当否は、この概念を援用しつつ土器論を展開することから明らかになるであろうが、この論考に対し、「文様をレベルに分けて分析していくという方法の先駆的なもの」(註16)との評価を始めいくつかの評価を知るが、稲田氏が示した概念を積極的に援用しつつ土器の分析を行った論考は数少ない。しかし全く無かったというわけではない。

今回ここで、稲田氏の概念を積極的に引用しつつ、縄紋土器の概念化と論理的編成を果たした例として、今日の縄紋土器型式の細分の方法のひとつの成果として、鈴木徳雄氏の堀之内1式土器の分類配列図(第1図)及びレジュメから筆者が作製した堀之内1式土器の分類と概念化、更に論理的編成の簡単な模式図(第2図)を示した(註17)。筆者も堀之内式土器について勉強をしているひとりであるが、筆者自身の「研究史的照射と今日的縄文式土器研究課題の模索」(註12)を通して、氏が示した分析方法には評価を与え積極的に援用していくべきだという点から、今回敢て呈示させていただいた。本来ならば詳細に検討を加えるべきなのであるが、紙数の都合と本稿の目的と掛け離れていることから省略させていただいた。

### III

系統的側面の土器型式の細分は、土器に於ける諸現象、例えば器形・成形技法・施紋具・施紋方法・紋様・紋様構成法・紋様帯・紋様帯構成法等

の、個々やその紐帯関係(構造)を概念化しその概念の論理的編成の中の画期をもって裁断することから始めなければならない。

ところが先史考古学に於いて、我々が我々の論理をもって分類し抽出したところの系統や、恣意的に裁断したところの細別型式が、縄紋時代の実体と如何なる関係を有するかといったことに対しての理論的な保証は無いと考えるのは不毛である。もしこのことを、先史考古学のもつ方法論の宿命と考える研究者がいるならば、その研究者は、実は先史時代の実体そのものが我々の論理のみからでしか再編成され得ないという先史考古学の学的基盤を自覚していないことになる(註19)。やはり我々は先学の正当な認識を受け継ぐ必然性から、土器型式の細分(系統を抽出してゆく細分と年代学的な細分)へむけて邁進しなければならない。山内清男氏の言葉を借りるまでもないが「余り分けすぎるというプレーキは落伍者の車について」いるのであり、「細分の秘術を尽くして」、「型式は益々細分され、究極まで推し進むべき」なのである。

### IV

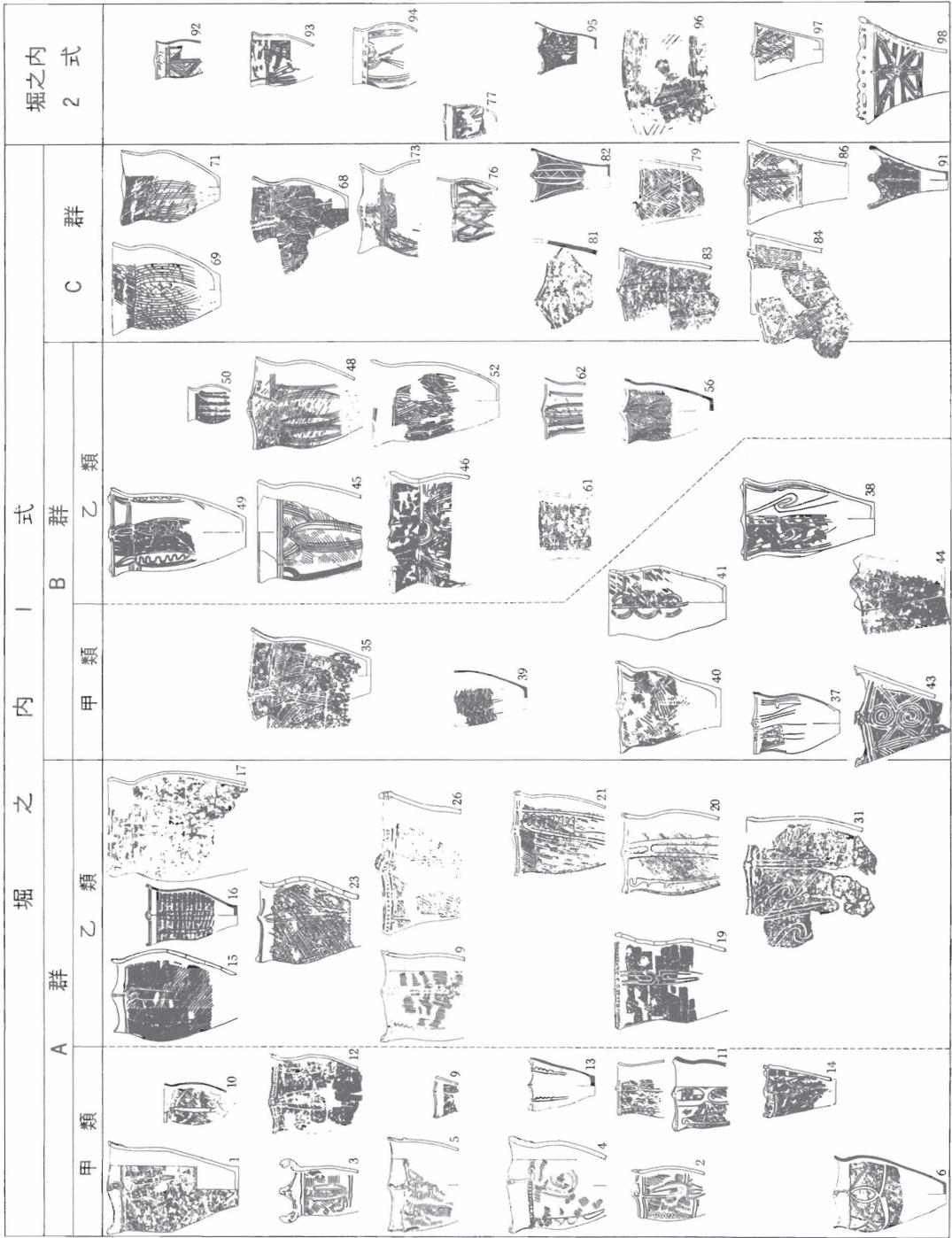
集落内での遺構の時期を認定する場合、集落出土の土器群を分類し配列してゆくことから始めることは言うまでもない。

今ここで、遺構中の床面直上の土器と覆土中の土器との関係(更には遺構と覆土そのものの関係)について述べる紙数も力量も持ち合わせていないが、床面直上の遺物が、状況としては遺構との関わりが最も深いという可能性がある。

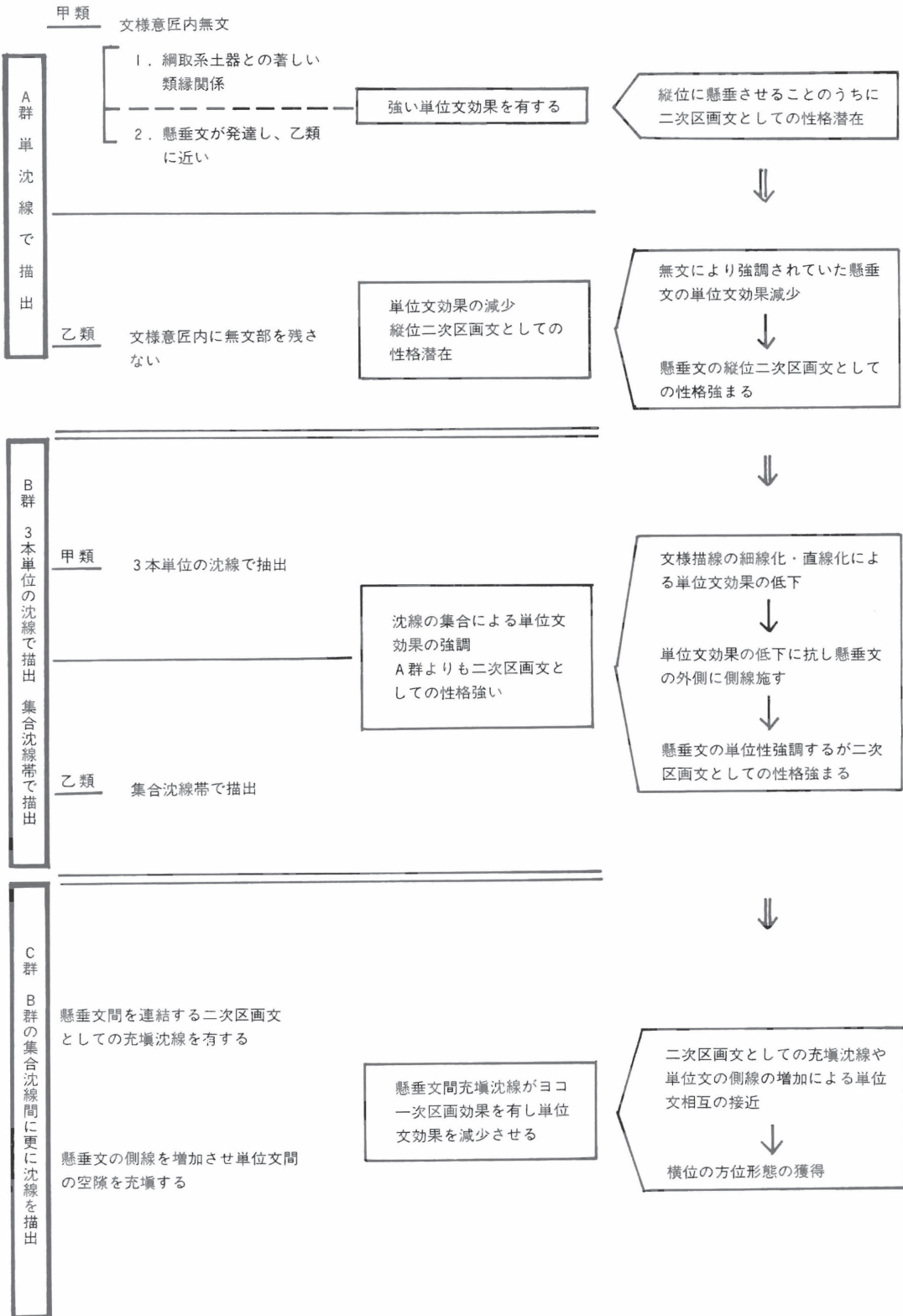
ところが、詳細な集落内での土器群の組列の前後のものは、床面直上であっても混在する例はある。更にはそれ以上の幅をもった混在もあるかもしれない。

仮に、住居址の床面直上の遺物に厳密な意味での一括性が保証されたとしよう。この段階で我々は床面直上出土遺物から“住居址が設営されていた期間”と“住居址が廃棄された時点”という2つの時間的側面を捉えることができよう。

我々が設定する集落内での時期区分(〇〇遺跡第△期)は、いうまでもなく土器型式更には細別型式により設定されている。客観的な年代学上の単位から導き出されたところの集落内での時期区



第1図 南関東東部堀之内1式土器分類配列図(文献17より転載)



第2図 変遷模式図(文献17より筆者が作製)



分を設定するという事は、ある幅をもった時間幅の中で捉えられる住居址等の存在を明らかにすることが第一の目的である。その意味で、例えば土器型式がひとつのながれを有する系統のなかから我々が恣意的に裁断したものであるように、そこから導き出された時間幅に収まる住居址(群)の存在も集落内での詳細な住居址の消長の動態からは恣意的に裁断された結果のものであるといえよう(註20)。

土器型式のより一層の細分の必要性が問われている今日、我々は土器型式のもつ今日的な二面性、つまり従来漠然といわれてきた年代学上の単位(タイムユニット)が、実は遺跡間(集落)間・領域間共通のタイムユニットであるという認識と、集落内での詳細な住居の消長の動態を明らかにしてゆくための、遺跡(集落)内でのタイムユニットという認識も存在することを捉えてゆかなければならない。

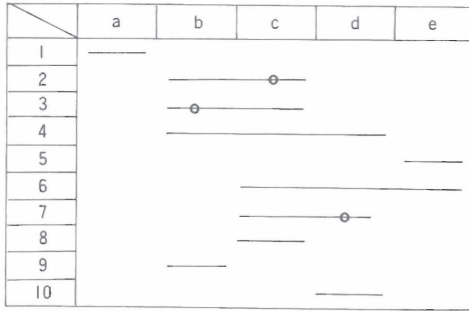
しかし一集落出土土器という当初から限定された資料の配列から導き出されたところの各細分型式(各期)と従来の土器型式(遺跡間共通のタイムユニット)との間に何ら質的な差異はない。例えば、一集落内での集団の移動の時期や、同一期に居住されていた住居の存在やその一軒一軒の消長の細かなズレを見極めようとするために、集落内でのより一層の精緻なタイムユニットの作製の先行が叫ばれても、土器型式の細分に於いて、現象を概念化するという事は、言うまでもなく対象となるすべてを規定していくことであり資料の限定性を超えてなされるべきものであって、一見集落論側からの要求からなされるように見える土器型式の細分は、それが概念の分節化である以上、従来の土器型式の細分化(の必要性の認識や方法論)と何ら変わるところはない。

かつて鈴木公雄氏は文献7に於いて「製作の同時性によってまとめられたタイムユニットとしての型式の細分の極は、一回の土器製作の作業によって作り出された一群の土器を明確にとらえるところに成立する」としているが、それを否定する根拠として、土器型式が遺跡間共通のタイムユニットである以上「土器の製作が、個々の集落なり、共同体なりで、自己完結的に行われていた可能性を加味して考えた場合、かかる一群の土器が編年の一単位として有効に作用するとは必ずしも思わ

れない」とし、更に、「現行の編年体系の中でも、各々の細分型式認定に対する個々の研究者の識別のずれなども思いおこせば」、同時製作された土器群に対し「器形、文様といったものに具体的なある変化なり差異が識別できてしかもそれが他の土器群と明らかに区別しようという認識が成立しない」と述べている。もちろん、先に文献13からの引用にもあるように「様々な解釈・概念を用意するという課題が存する」のであり、あらゆる可能性を模索してゆかなければならないのであるが、鈴木公雄氏のこれらの見解は、縄紋土器型式の今日的な方法論の模索の一側面として、筆者は尊重してゆきたいと思っている。

## V

さて、では我々は集落の住居址の時期設定を如何なる方法をもってすべきであろうか。先に集落間共通のタイムユニットである土器型式の細分に際して、一括遺物の有効性が(あくまでも今日的な面から)希薄であることを述べたが、集落内では先に呈示した“住居址が設営されていた時期”と“住居址が廃棄された時点”という一括遺物の中の2つの階層が有効的に作用し得るのではなからうか。無論、例えば住居址に於いて床面直上遺物をこれらの階層へ絞り込む手段(一括性の保証)に関しては、依然として明瞭な方法論が存在しないという今日的制約はあるものの、一括性が保証されたという前提のもと、これら2つの階層と住居址の動態の関係に関して模索することはまぎら意味のないことではなからう。少なくとも2つの階層を有する土器群に対し、“現在に過去の遺物は存在しても未来の物は存在し得ない”という当然の論から、より新相の土器をもって時期を設定していくという方法は将来的にも有効なであろうか。例えば今ここで、細別型式 a・b・c・d・e と10軒の住居址の縄紋集落を想定してみよう(図3)。ここでいう細別型式とは鈴木公雄氏のいう“一回の製作”という机上の究極論であるところのものではなく、今後の縄紋土器型式研究の深化に伴い導き出されたところの細別型式である。それぞれの住居址から一括遺物が抽出されたとしよう。しかし住居址の消長に関する時間的経違すべてが一括遺物として律せられている訳ではなく、あくまで先に述べた2つの階層の現象が示されている。



第3図 住居址と細別型式(○~埋甕等)

更に埋甕・埋甕炉といった住居の営みに関係の強い要素を加味した場合、この集落の住居址の動態に関して、諸氏いろいろの考えもあるかとは思いますが、例えば1→9→2・3・8→4→7・10→5・6といった変遷を導き出すことも可能である。つまり細別型式5に対し、住居址内一括遺物の2つの階層の組み合わせ(更に埋甕等の要素を加味して)から6期の集落の変遷を捉え得ることも可能なのではなからうか。

無論この2つの階層自体を組み合わせたとところのものが如何なる規定性(概念)を有しているかということについてははっきりと答える術があるわけではないし、2つの階層そのものが細別型式として現象してくれるという保証もない。むしろ型式細分の深化に伴い2つの階層が一つの細別型式に対応することが論証されるかもしれない。更に住居址から一括遺物が抽出し得るという保証も100%ではない。机上の空論と呼ぶにふさわしい所以でもある。誤解のないように付け加えておくならば、筆者がこのような想定に対し、将来的な成果を確信しているわけではないし、この想定を前提に集落を調査しているわけでもない。

大切なことは、あらゆる可能性を“叩き台”として提出し検討することの中から、有効な手段を抽出し、排除されるべきものを排除していく姿勢であろう。

『今回の論文の最後に記す意味でも、集落地ごと、そしてそれら集落址群を包括した意味での地域における様々な変化を、順序立てて理解し、説明する際に果たす土器細分の役割である。単に堀之内1式・2式といった型式段階論をもってしては、当時の集落・地域社会に対処するのは不可能であり、1集落をとってみても、長期の断絶期間を経た住居址相互に移り住みを考える如き誤りを

繰り返しかねない。反対に、土器研究の可能性が未だ窮められていない現状をふまえ、その有効性を問うためにも、今後、集落論・社会論との結合が求められる。より有意義な時期設定、段階設定は、それらの研究の止揚によってなされるべきであろう』(註21)。

## おわりに

土器型式の細分も集落の分析も、多くの先学の認識に支えられ、今日的意義と今日的有効性と今日的課題を有している。繰り返すまでもなく我々は、受け継がれた認識をしっかりと学んでゆくことから始めなければならない。何故ならば我々もまた受け継いだ認識を發展させ止揚をめざし、次の世代へ送り届ける義務を有しているからである。

今回本誌の誌上を借り筆者の考えをまとめさせていただいた。もとより何らかの結論めいたものを引き出すことを目的としたわけではないが、諸氏には活字にするまでもない当然のことや、納得のゆかない点などが多々あり且つ筆者の表現能力の乏しさを加わり、いささかうんざりしているのではないかと危惧する次第なのであるが、本稿が縄文土器研究や縄文集落研究へむけてほんのわずかであっても参考になる点があれば望外の喜びであります。最後に諸氏の御批判・御教示を期待しつつ筆を置かせていただきます。

## 註

- 1) 佐藤達夫「土器型式の実態」『日本考古学の現状と課題』1974
- 2) 層位学的方法には包含層に於ける一括遺物と遺構内に於ける一括遺物がある。今ここで一括遺物に関する議論には深入りしないが、筆者は「住み・葬り・作り・収蔵するという行為が一中略一各々「住居・墓・アトリエ・デポ」という遺構と原則的に対応する」という観点から、それぞれの遺構から一括遺物(同時に埋没したもの)を抽出し得ると考える。  
田中英司「住居・墓・アトリエ・デポ」『土曜考古』第8号 1984
- 3) ここでいう土器型式は本稿中では特にことわりのない限り系統的側面の型式である。
- 4) 岡本勇「まえがき」・「縄文土器の生成から發展へ」『縄文土器大成』1 1982



- 5) ここでいう一括遺物は本稿中では特にことわりのない限り誠に勝手ながら筆者自身が注目している縄紋時代の住居址からの一括遺物に限定させていただくことを諒とされたい。更に蛇足ではあるが、厳密な意味での一括遺物とはいうまでもなく「まったく同時に埋められたとみなすべき状況で発見されたひとまとまりの遺物」(文献6のなかでモンテリウスの定義として引用されている)である。しかし我々は今日、日常的に「共伴」という用語をも用いているわけであるが、とりあえず筆者は共伴と一緒に出土した資料すべてに共伴関係があると捉え、そのなかから抽出された同時に廃棄された可能性のあるものが一括遺物であると考えたい。
- 6) 田中琢「型式学の問題」『日本考古学を学ぶ』1 1978
- 7) 鈴木公雄「土器型式における時間の問題『上代文化』第38輯 1969
- 8) むしろ学史を振り返ってみるならば、設定された土器型式の相対的な編年学的位置は多くの層位的出土例や一括資料や遺構の切り合い関係に裏打ちされてきた面も多々あるわけであり、この先学の認識は今日の縄紋土器型式の編年学的研究の到達点を構築する重要な基盤でもある。
- 9) 山内清男「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』第1巻第1号 1937
- 10) 鈴木公雄「土器型式の認定方法としてのセットの意義」『考古学手帖』21 1964
- 11) 文献10
- 12) 「研究史的照射と今日的縄文式土器研究課題の模索との交差に、本邦の先史考古学研究の進むべき一つの方向があるのではないかと私考する次第である」という指摘は極めて重要である。大塚達郎「縄文時代後期加曽利B式土器の研究(1)」『東京大学文学部考古学研究室研究概要』第2号 1983
- 13) 大塚達郎「縄文時代の研究の動向」『日本考古学年報』35(1982年度版) 1985
- 14) 例えば、谷井彪氏の一連の勝坂式土器に関する分析などは、該期の土器群の一見複雑に見える様相を概念化することによって、その構造を明らかにしたという点で高く評価できよう。
- 15) 稲田孝司「縄文式土器文様発達史・素描(上)」『考古学研究』72 1972

更に同氏のこの論考と「尖頭器文化の出現と旧石器的石器製作の解体」『考古学研究』59 1969の2論考をより一層発展させ「農耕のない、あるいは少なくとも一般的でない縄文社会の、新石器時代としての特殊な性格」について言及した「原始社会の日本の特質」『日本史を学ぶ』1 1975—有斐閣選書—は、土器そのもののなかから導き出された概念をもって原始社会の特質に関して言及されており、極めて注目されよう。

- 16) 谷井彪「縄文土器の単位とその意味」(下)『古文化文化』31-3 1979
- 17) 市立市川考古博物館「シンポジウム堀之内式土器資料集」及び「シンポジウム堀之内式土器の記録」1982・1983

尚、同書では施紋上の伝統の差異から堀之内式土器の祖型を規定し、更に堀之内2式土器への連続性と堀之内1式土器との型式学的画期をも述べているが、模式図に於いては堀之内1式土器内部での変遷のみを対象とした。更に氏の謂う堀之内式土器I種の1式C群期と2式期に於ける特異性についても割愛させていただいた。本来ならば模式図の作製にあたっては、同氏の許可と校閲を受けるべきところであるが、今日の研究姿勢が、一般的に論文を読み研究者それぞれが自身の観点から把握し解釈し援用するという状況と、筆者自身が他の研究者と公平に認識を受け継ぐべきであるという点から、この模式図の個々の表現はレジュメ中のものにほぼ準拠しているが、文章の選択やその配列方法に関しては、筆者なりの理解から行なったものであることを明記しておく。

又、同氏の関東西部に於ける堀之内1式土器に対する同様の分析例として文献18をあげることができる。

- 18) 鈴木徳雄「関東西部における縄文後期前半の土器様相」『王子台遺跡とその周辺』1984 東海大学文学部連合会考古学研究会
- 19) 歴史時代の考古学を鳥瞰してみると、例えば土器型式と社会の関係の再構成した論考として福田健司「南武蔵における奈良時代の土器編年とその史的背景」『考古学雑誌』第64巻3号 1978など注目すべき論考が多い。生産体系を支えたところの社会体制と生産物(土器)の関係



を論ずる場合、社会体制が一定のレベルまで明らかにされた歴史時代の考古学的論考から先史考古学を学ぶ者はそのアプローチの方法などから多くのものを吸収することができる。

20) しかしこのことは土器型式が詳細な集落の動態に有効的に作用しないことを述べている訳ではない。言うまでもなく集落の消長という時間

的経過から導きだされる実体に対し、我々のとりうるアプローチの仕方が年代学上の単位（型式）の細分しかないからである。

21) 石井寛「堀之内2式土器の研究（予察）」『調査研究収録』第5冊 1984 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団

## 東南部地区における古代農業資料

小 高 春 雄

### 1. はじめに

千葉東南部地区における埋蔵文化財の調査も14年目を迎え、とりわけ縄文時代、古墳時代についての資料の蓄積には著しいものがある。また、多くの新知見も特記されよう。昭和61年、同62年度の調査では、古代農業について二、三の新しい資料を得ている。いずれも本県では稀有な例であり、その内容を公表することは意義あることと思われるので、ここに簡単な紹介したい。

### 2. 資料の概要

まず基本的な説明は、第1表で示し、以下個々の資料についてつけ加えることとしたい。

有吉北貝塚の炭化種子は古墳時代の大形住居覆土中より出土しているが、モモ、スモモの若干数

を除けば総て覆土の柱状サンプルを水洗して得られた資料である。すなわち、土層観察用に直交して設けた幅30cmのセクションベルトを、その交点を基準にして縦横30cm、厚さ住居底面までの土塊を一サンプルとして、ひとつおきに採取し、更に、それを層ごとに分割した。住居の覆土は2層に分けられ、その差は色調、混入物の相違によって識別可能であり、資料混入の過程を考える上で必要とみたためである。

切り取ったサンプルは室内に持ち帰り、目1mmのフルイによってウォーターセパレーションを行なった。水洗後フルイ上に残った物質の多くは小礫と炭化材の小片であったが、この中に混って炭化種子が認められた。分離資料は自然乾燥を待ち、ピンセットにより種子と思われる物質を小片まで



第1図 遺跡の位置

- 1 有吉北貝塚
- 2 椎名崎古墳群
- 3 神門遺跡

国土地理院  
1:50000 蘇我



■ 左図の位置